

第7章 労働力

司会…7章は皆さんもよく学習している「労働力」です。7章と次号8章を担当してくれるのは、嬉しいことに30代の青年です。徳島県協三好市職友の会の安藤悠輔さん、よろしくお願います。

労働力とは

マルクスは「どの商品もの価値の本性を分析した」として、「特殊な労働の価値」を考えていく必要性があると思いました。

外見上の逆説によって、労働者が毎

日売るものは労働であるから、それは価格を持ちます。商品の価格とはその価値の貨幣的表現ですから、「労働の価値」というようなものが確かに存在するに違いないと確信されるのではないでしょうか。しかし、普通でいう意味の労働の価値というようなのは存在しないのだと述べました。どういうことなのでしょうか？

これまで学習してきた「一商品に結晶した社会的必要労働の分量がその商品の価値を形成する」という価値概念を適用すると、「十時間労働日の価値が十時間分の労働、すなわち、その労

働日に含まれている労働の分量に等しい」という、同義反復的で無意義な言い表し方になってしまいます。「労働の価値」という表現の、真の、だが隠れた意味をひとたび発見したならば、我々が「価値のかかる不合理な、そして一見不可能な適用を説明しうる」とし、天体の例を挙げています。

『天体の現実の運行を確かめたならば、天体の外見的または単に現象的な運行を説明しうる』と。これは「地球は自転しながら太陽の周りを公転するという事実を知っているならば、あえて太陽は東から昇り西に沈むように移

◆みんなの学習講座

動すると表現することができる」ということなのでしょう。

つまり、外見上労働者は労働に対して対価を得ているように見えますが、実際に深く見ていくと「労働者が売るのは、彼の労働そのものではなくて、彼の労働力」であって、「労働力の一時的な自由処分を彼が資本家に譲渡する」のであるということです。だからこそ「ひとがその労働力を売ることのできる最長時間が規定されている」のです。あくまで譲渡するのは一定時間限定の労働力であり、24時間365日好きに働かせられるなら奴隷同然だと述べています。

そして「この基礎から出発すれば、われわれは、他のすべての商品の価値と同じように、労働の価値を決定しよう」ということになります。

資本家と労働者の関係

マルクスはここでその価値の分析に入る前に前提としてある問題を説明しています。「一方では土地・機械・原料および生活手段を所有する一組の買手を見出し、他方では、自分の労働力すなわち労働する腕と頭のほかに売るべき何ものもたない一組の売手を見出すという、この奇妙な現象はどうして生ずるか？」この一方とは、利潤をあげて自らを富ませるためにたえず買っている「資本家側」であり、他方とは、自分の生計を稼ぐためにたえず売っている「労働者側」のことを指しています。

この問題の研究を経済学者たちは「先行的または本源的蓄積」と名付けているが、その中身は「本源的収奪と名付けられるべきものの研究である」と述べています。しかしこれは「労働人と彼の労働用具とのあいだに

存在する本源的結合の分解を生ずる一連の歴史的過程を意味するにすぎぬことを発見するであろう。」としています。つまり、農奴が農具・馬などの労働手段を所有していた段階（結合）から、社会発展によってそれらを奪われ（分解）、賃金労働者となった過程について述べているように思える。一度引き剥がされれば、新たな社会変革によってその関係が転覆し、新たな社会においてそれを取り戻すまでは、奪われた関係性は維持・増大されていくであろう。しかし、こうした研究は、当面の対象の範囲外のものでありひとまずここでは置いておくこととします。

労働力の価値を構成する

三つの費用

では労働力の価値とは何かということとです。ほかの商品の価値と同じく

「その生産に必要な労働の分量によって決定される。」と述べています。つまり労働力を生産し、維持し、永続させるに要する価値によって決まるということとです。言わば『労働力の再生産費』ということになり、中身を詳しく見ていくと、次のとおりです。

生理的・文化的生活費

労働力は人間の生きた個体内にのみ存在するので、人間の成長・生命維持のために消費する衣・食・住など必需品の費用や文化的に生活を営むための費用。

家族の生活費・繁殖費

人間は機械同様に消耗し他の人間に置き換えられねばならないので（加齢と引退）、自分に代わり労働者種族を永続させる次世代（子）を育成する必需品の費用。

育成費・教育費

労働力発達・熟練獲得のための教

育・啓発費。（※われわれの目的のためには些細な教育および啓発費しか要しない平均労働だけを考察すれば十分である）

「賃金の平等」を要求する

叫びは謬見ひびきはみづみ

マルクスは加えて、この機会に述べておかねばならないとして、「相違なる質の労働力を生産する費用は相違なるから、相違なる事業で使用される労働力の価値も相違なるに違いない。」だから「賃金の平等を要求する」ことは本来誤った考え方であり、決して満たされえない願望であるとし、「前提を認めて結論を避けようとする、かの誤った急進主義の結果」と否定しています。つまり、「労働力の価値は、他の各商品の価値と同じように決定される。そして、相違なる種類の労働力は相違なる価値を有する」。だから「す

なわちそれらの生産のために相違なる分量の労働を必要とする」。よって「それらの労働力は、労働市場で相違なる価格をつけられるに違いない」。

そのため「賃銀制度の基礎のうえで平等な報酬または公正な報酬をさえ要求することは、奴隷制度の基礎のうえで自由を要求するのと同じことである」としています。奴隷制度において、自由の実現をすることは、奴隷制度の廃止することそのものをさし、賃銀制度において、平等・公正な賃銀の実現をすることは、賃銀制度の廃止することそのものをさすとするなら、賃金制度下では平等・公正となりえないことが「必然で不可避」ということになるのです。

労働と労働力の違い

司会：7月号、8月号で「価値とは何か」ということを学びました。「一商

◆みんなの学習講座



万年筆づくり (つくるのは「労働」、つくるのに費やすのは「労働力」)

「労働と労働力の違い」ですが、皆さんの意見を伺えますか。
HG: 私のこのペンで考えれば、これをつくった行為は労働で、つくるために費やした力が労働力です。今章では、資本家がいかに「労働に対して対価を払っている」という外

品に結晶した社会的必要労働の分量がその商品の価値を形成する」というところ。価値とは社会的労働の結晶であるけれど、さらに一歩進んで、その価値をつくる労働そのものも商品であるということから、深く考えていくというのが今回の学習です。まず

見上矛盾がなく、そう思わされていることに対して、実際は労働力に対して対価が払われるべきであるということが書かれています。

KH: 天体の例が出されていますね。本当は地球自体が太陽の周りを回っています。現象的に見える太陽が東から昇って西に沈んでいると思わされているのと同様に、外見上労働をしたことに対して賃金が支払われているように見えますが、本当はどうなのかということですね。

柳本: この部分は非常に重要です。マルクス以前のリカード等は、人間の労働が価値をつくるというところまでは見つけました。しかし剰余価値がどうして生まれるのかということはわかりません。マルクスは労働力、そして剰余価値の仕組みを発見したことはすごいことでした。人間は労働する能力を持っています。働くために必要な労働力であり、労働力を發揮し

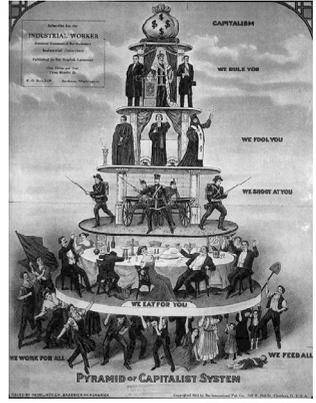
て働いたことそのものを労働といいますが。

労働力は価値の源泉

須藤: 労働力は働く能力です。資本主義の初期から労働に対する対価は後払いです。8時間労働したからこれだけ払うという。それを見ると労働したことにに対して賃金が支払われる。いわゆる「労働の価値」というようにしか見えないということです。しかし実際は「私たちが働くための能力を時間で売り、資本家がそれを買って行使する。」このことで価値が生まれるのです。

OC: 資本家はその本質を隠したいがために、労働に対して賃金を払うという風に見せかけているということですか。

須藤: そうです。本来は労働力を買っているのだから、先払いでないといけ



階級社会の風刺画（最下層が労働者階級）

労働者階級は

いかにして生まれたか

司会…次に資本家と労働者の関係です。労働者が生まれた歴史的過程についてもレポーターがわかりやすく触れていきますね。

まません。私たちがスーパーでリンゴを食べてからお金を払うことはありませぬよね。労働力も同じなのです。ちなみになぜ資本家は労働力を買うのかということですが、労働者が働くことによって物が生産されます。つまり価値が生まれる。労働力は価値の源泉であるということ。労働者に賃金として支払う価値以上の価値を生み出すということが重要です。性能の良い機械だけそこにあっても、労働者が働きかけなければ価値は生まれません。そこに資本家が欲しがる労働力の市場価値があるのです。

須藤…マルクスが問題にしているのは、

そもそもなぜ歴史的に労働力を買うことでしか生きていけない労働者が発生したのかということです。奴隷制社会では、奴隷そのものが生産用具でしたので自由は全くありませんでした。次に封建制社会では、農奴は生産用具を持っており、何とか生活はできますが、土地に縛られていて自由ではありませんでした。資本主義社会になると労働者は土地から離され自由になりました。また自分の労働力も自由に処分ができるようになり、ここに二重の自由を手にしたのです。その代わりに自分の労働力売ることでしか生きていく術が

ない状態に置かれたのです。ここに労働力売る労働者とそれを買う資本家という2大階級が歴史的に生まれてきたということです。

柳本…資本主義初期は6歳ぐらいの子どもも働かされていました。衛生管理も悪く狭い部屋に押し込まれ、劣悪な労働環境で、寿命も短かったのです。

イギリスの労働者の平均寿命は19歳ほどでした。このままでは社会が成り立たないので、労働時間の制限を加えることになり、1833年に初めて「工場法」ができます。日本でいえば労働基準法のようなもので、繰り返し改正が行われ、12時間労働や10時間労働、年齢制限が設けられていきました。しかしこれは労働者を守るという意味でなく、あくまで資本主義社会の延命のためにやったのです。

◆みんなの学習講座



19世紀の児童労働 (煙突掃除)

再生産でできるだけの賃金を

司会：続いて、労働力の価値とはどういうことです。労働組合でも青年部が賃金論を学習し、赤手帳付けなど取り組みのなかで学んできたと思います、ここで言いたいところは何でしょうか。
安藤：労働の価値ではなく、労働力の価値が対価にならなくてはならないと学びました。ここでは労働力の価値の中身は何なのかということが明らかに

されます。そこには労働者の衣食住の生活費はもちろん、社会の維持のために労働者が再生産されなくてはならないところまでが含まれている必要があるということが書かれています。
司会：ここで疑問点などはありますか。
NY：安倍前首相は女性活躍をスローガンに女性労働者を増やしてきましたが、実際は非正規労働者を中心とした低賃金労働者ばかりでした。ここで書かれている労働力の価値は彼女たちの賃金には反映されていないと思います。
HG：女性に限らず男性も含めて一人の労働者が生きていくため、そして再生産していくための価値は当然賃金として受け取らなければいけないのだけれど、そんな社会になっていませんね。
TG：労働力の価値どおりに賃金が支払われているのかは重要ですね。特に若い世代はこれから家庭も持つて子を産み育てていけるのかどうか、常にそこは追求していかないといけないと感じ

じます。

賃金の平等要求は

間違っているのか

HS：p73・5行目から「賃銀の平等を要求する叫びは・・・急進主義の結果である」とありますが、そこを教えてもらえますか。

須藤：職業も働き方もそれぞれ違うなかで、全てを同じ賃金にすることは間違っているということです。それを実現するには賃金制度自体を廃止するしかないということです。

司会：フランスの小ブルジョア哲学者ブルードンや、その流れをくむバクーニンなどは、平等な賃金、階級の平等や財産の平等を訴えましたが、それは階級関係を無視した資本主義体制温存の社会改革であるとして、マルクスは批判したのです。